

(水稻の生育状況と今後の対策－3【6月22日調査基準日】)

# 間断かん水しましょう！！

平成27年6月26日

那須農業振興事務所

平年より生育は進み、必要茎数は確保されています。

間断かん水を中心とした水管理の徹底を！

～ 出穂は3～4日程度早まります ～

前回調査（6月8日）では、梅雨入り前の気温・日照時間が平年に比べ高く経過したことから、草丈は長く、順調に茎数が確保されました。その後は、気温はやや高く（平年差+1.1℃）、日照時間はほぼ平年並（平年比102%）で経過しました。

6月22日現在、分施肥体系では平年に比べ、葉齢は進んでおり、草丈は長く、茎数は少なく、葉色はやや淡い状況です。全量基肥体系では平年に比べ、葉齢はやや進んでおり、草丈は平年並、茎数は多く、葉色は淡い状況です。

必要茎数は確保されておりますので、間断かん水を中心とした水管理をしましょう。



図 1 水稻の姿（6月22日現在）

## ◎現在の生育状況

		移植日	葉齢	草丈 (cm)	1株茎数 (本/株)	茎数 (本/㎡)	葉色	葉色× 茎数	
分 施	管内	27年	5/5	10.1	49.5	25.4	470.8	4.4	2065
	平均	昨年	5/5	9.5	49.9	26.2	484.1	4.5	2178
		平年	5/5	9.2	44.6	-	525.8	4.6	2386
		平年比・差	±0	+0.9	111	-	90	-0.2	87
全 量	南部	27年	5/6	9.9	50.8	28.1	539.0	4.1	2210
		昨年	5/8	9.8	54.2	27.7	518.0	4.3	2227
		平年	5/6	9.7	49.9	-	478.8	4.6	2182
		平年比・差	±0	+0.2	102	-	113	-0.5	101

※那須農業振興事務所調べ（6月22日調査基準日）

・分施（基肥+穂肥）・・・管内北部（那須町）、管内南部（大田原市）

・全量基肥（ひとふりくん1号）・・・那須塩原市

## 【出穂期予測】

今後、気温が平年並みに経過した場合、地域によって差がありますが、平年よりも3～4日程度早く、昨年よりも1～2日遅い予想です。気温が昨年並み（+1.0℃）に経過した場合、平年より5日程度早く、昨年並となる予想です。

※平均気温から算出した生育ステージ（DVS値）より出穂期を予測。

## ◎ 今後の管理

### ① 水管理

ほ場毎に葉色や茎数をよく観察し、生育量に応じた水管理を実施しましょう。

葉色が淡くなっているほ場では強い中干しは行わず、定期的な間断かん水を続けて葉色維持に努めましょう。葉色が濃く草姿が乱れている（生育診断値（葉色×茎数）が高い）ほ場では、中干しあるいは強め（湛水期間の短い）の間断かん水を行って、葉色を落としましょう。

乳白米防止の観点からも、粒数が過剰にならないように適正な水管理により茎数を制御することが重要です。

○ 間断かん水を基本とした水管理を行うほ場

- ・ 生育診断値（葉色×莖数）が、生育診断指標値（下表参照）の範囲内～指標値以下のほ場。  
例：葉色が4.1以下で、平均1株莖数23本以下
- ・ 現在の生育診断値が指標値を上回っていても、新たに展開する葉の色が淡く、葉色の急激な低下が予想されるほ場。（診断値が指標値以下で新たに展開する葉の色が淡い場合は、軽めの間断かん水。）
- ・ 浅耕田、地力の低いほ場。

○ 最高分けつ期頃（6月下旬～7月上旬頃）に中干しが必要なほ場

- ・ 診断値が指標値を大幅に上回っているほ場。  
例：葉色が5.0以上で、平均1株莖数26本以上

（参考）早植「コシヒカリ」の生育診断指標値（県北部）

◇栽植密度が20株/㎡の場合

時期	葉色	㎡当たり莖数	葉色×莖数
移植後30日	4.9～5.1	370～420	1,900～2,200
最高分けつ期	4.2～4.4	470～510	2,000～2,300
出穂前30日	3.9～4.2	450～470	1,800～2,050
出穂前15日	3.6～4.0	400～430	1,450～1,700

◇栽植密度が22株/㎡の場合

時期	葉色	㎡当たり莖数	葉色×莖数
移植後30日	4.9～5.1	410～460	2,000～2,300
最高分けつ期	4.2～4.4	530～570	2,300～2,550
出穂前30日	3.9～4.2	500～520	2,000～2,200
出穂前15日	3.6～4.0	450～480	1,600～1,950

注意：葉色は葉色板（葉色カラースケール）で、完全展開最上位葉を測定する（単葉法）。

（色の濃さは、1：淡い ～ 7：濃い）

② 加里追肥

加里は流亡しやすく、基肥と追肥の分施が原則になります。加里が不足すると、根の活力が低下したり、デンプン生成がうまくいかず乳白米が発生しやすくなります。

天候不順時は稲体の窒素濃度が高くなりやすく、拮抗作用で加里の吸収は抑制されるため、追肥により積極的に加里濃度を高める必要があります。特に、分けつ盛期以降は加里濃度が低くなるので、出穂40～45日前頃（6月下旬頃）に積極的に加里を成分で4～5kg/10a施用しましょう。加里を施用すると一時的に葉色が上がり、根の活力向上や下葉枯れ防止の効果もあります。

また、稲は珪酸をよく吸収する作物で、吸収した珪酸によって倒伏しにくい稈をつくることができます。加里と珪酸が同時に施用できる珪酸加里の早期追肥（20～25kg/10a）がオススメです。

なお、葉色が淡くても窒素成分による“つなぎ肥”は基本的に行わないでください。

③ 病虫害防除

(1) いもち病

ほ場をよく観察し、葉いもちの早期発見・早期防除に努めましょう。

※BLASTAM（葉いもち感染好適日条件）では、6/26現在感染好適日は平年より北部で多く（大田原1回：6/18、黒磯3回：6/16～18）出現しています。

(2) イネドロオウムシ

箱施用剤を使用していないほ場等で、食害葉が見られます。被害の大きいほ場では適切な防除を行いましょう。

(3) フタオビコヤガ幼虫（イネアオムシ）・イネツトムシ

1年に3～6回程度発生を繰り返すイネアオムシ・イネツトムシですが、イネアオムシの発生が多くなる時期になりました。今後成長し、次世代以降での大発生・被害増が考えられるので、ほ場内をよく観察し、早期発見と早期防除を行いましょう。

遅植ほ場や多肥ほ場等で発生が多いので、隣接・近接ほ場も確認しながら防除を行いましょう。